

## 社会科創設期における郷土教育の展開とその意義

—千々和 實の『私達の郷土』を手掛かりとして—

安 藤 雅 之

Development and Significance of Local Education in  
the Founding Period of Social Studies

— Using Minoru Chijiwa's 'Our Local' as a Clue —

Masayuki ANDO

2014年11月18日受理

### はじめに

昭和22（1947）年に新設された社会科は、新しく動き出そうとする日本のエネルギーであり、戦後教育改革を牽引する花形教科であった。当時、全国師範学校歴史教育研究会は株式会社世界社とともに社会科への期待を確かな学習として実現できるように後押ししようと「社会科の友」叢書を発刊した。発刊の趣意は次のように書かれている。

「教育の大改革の中で、最も重視せられるのは、社会科の新設であるが、その本姿は、自発的学習をうながすとともに、単に社会の現実面を把握させるだけでなく、これを時間的動態として認識させて、はじめて教育の目的を達するものと考えられる。しかるに現在の諸事情は、この要請にかなわず、殊に良参良書すらないことは、生徒の将来と照しあわせて暗然たらざるを得ない。われらはここに深く考えるところあり、この次代を背負うものに優良な参考書を與える目的をもって、社会科の友叢書を発行することにした」<sup>1)</sup>。期待された社会科新設に対して何の教育的保障もなかった当時の困難さや苦渋を克服するための決意を発刊の趣意から読み取ることができる。

さらに「本叢書の特色の一は、全国各地の社会科担当者が、その専攻と切実な体験とをもとにし、各地の資料や附属機関の実験をよく生かして、執筆したことである」<sup>2)</sup>と続けられ、「文章を小学生向にしたが、力に応じて理解度を深める含みをもたせ、しかも、美しく興味あり親しみやすい、真の学習の友たらしめよ

うと工夫した」<sup>3)</sup>、と担当した教師たちの本書に対する期待と共に社会科活性化への弾みを本書から起こそうとする意欲と熱意が伝わってくる。

このように、社会科の船出は必ずしも順調ではなく、各地の熱意あふれる教師の力によって舵がとられたのである。

そこで、本稿は昭和 23 (1948) 年 12 月 10 日に出版された社会科叢書第 4 巻『私達の郷土』の概要及び内容を検討することを通して、社会科創設期における社会科教育の状況を郷土教育の展開から考察することを目的とする。

(尚、引用等にあたっては旧字体の文字は、新字体に変換して本稿では記載している。)

## 1. 『私達の郷土』の概要

### (1) 『私達の郷土』の全体構成

『私達の郷土』は、東京第一師範学校（現：東京学芸大学教育学部の母体）が責任・担当しているが、全国師範学校歴史教育研究会編とあり、著者は千々和實（1903 - 1985）で、他に 7 名が部分執筆をしている。千々和は、福岡県鞍手郡木屋瀬町（現・北九州市八幡西区）出身で、広島高等師範学校を卒業後、長崎県立長崎高等女学校教諭となり、その後東京文理科大学で学び、卒業後は群馬県師範学校の教諭となっている。1942 年には東京府青山師範学校の教諭となり、本書執筆の 1 年後に東京学芸大学教授に就任している。1967 年に同大学を退官（名誉教授）し、都留文科大学教授、上武大学教授を歴任している。

本書は 190 ページから構成（表 1）される B 6 版の書籍である。表紙中央には、山梨県の農家の家屋とともに、庭先で脱穀をしているイラストが描かれている。装丁は岡村夫二である。

表 1 『私達の郷土』の内容構成

口絵	写真 「郷土」(福岡県鞍手郡木屋瀬町金剛) (裏面) 写真の説明 (1 ~ 20)	
はじめに		千々和 實
目次		
「社会の友」叢書 顧問		
私達の郷土		千々和 實
1 郷土とは何か		
(1) 環境		
(2) 環境と郷土とは、どちらがうか		
(3) 郷土と故郷とは、どちらがうか		
(4) 誕生地ばかりが郷土ではない		
(5) 誕生地にとどまっている人口		
(6) 本籍地と郷土とは、どういう関係になるか		

2	郷土を失える人々	
	(1) めまぐるしい移転の生活	
	(2) やむを得ず転校する子に	
	(3) 移りあるいて、郷土をおもう	千々和 矩子
	(4) 夢を追って移転する人たち	
3	郷土の建設	
	(1) 愛する郷土をもつことができるか	
	(2) 新しい郷土を建設しよう	伊藤眞三郎
	(3) 郷土愛と郷土研究との関係	
	(4) おのれを知るには、まず郷土を知れ	
	(5) 郷土に帰れ	
4	郷土の思い出	
	(1) 明治のはじめの郷土（福島県）	赤津隆助
	(2) 大正のころの郷土（宮城県）	阿部重雄
	(3) 大正時代の思い出（瀬戸内海の小島）	伊瀬仙太郎
5	郷土の拡大	
	(1) 環境のあらまし	
	(2) おさない時—（記憶の夜あけ）	
	(3) 親戚へ行く—郷土拡大の第一期	
	(4) 小学校入学—郷土拡大の第二期	
	(5) 遠足と旅行—郷土拡大の第三期	
6	郷土の研究	
	(1) 郷土の成り立ち—郷土の社会と文化	
	(2) どこから研究をはじめるか 郷土研究のうちわけ	
	(3) 歴史を経てきた郷土	
	(4) 歴史をもつ私の郷土（北海道）	扇谷 修
	(5) わが郷土に、いつ人が住みはじめたか	
	(6) 人は生活の跡をのこす	
	(7) 住居に選ばれる所	
	(8) 古い郷村	
7	農村の研究	
	(1) 農村の人口のうごき	
	(2) 炭田地方の人口のうごき	
	(3) 農耕の生活	
8	郷土の石炭と製鉄	
	(1) 日本最初の出炭地	
	(2) 炭鉱業の発展	
	(3) 八幡の製鉄所	

9 協同研究の実例	
郷土世田谷を学ぶ子どもたち	山崎幸一郎
郷土研究の参考書と資料	
「社会科の友」叢書発刊の趣意	全国師範学校歴史教育研究会 株式会社 世界社
「社会科の友」叢書書目 (※1～37を一覧で紹介)	
著者紹介・発行者・印刷者・発行所	
つづいて出る社会科の友 (※『火と水』、『国のはじめ』、『経済と職業』の紹介)	
	全190ページ+4ページ (ページ番号無)

註：アンダーライン部分は筆者による加筆である。

## (2) 構成上の特色

### ①口絵

口絵には、「郷土」と表題のついた白黒写真（1から20の番号記載）が掲載されている。写真は千々和の出身地である福岡県鞍手郡木屋瀬町金剛の景観であり、撮影範囲や状況から推測すると航空写真ではなく当地にある高い山から撮影したものと思われる。また口絵の裏ページには写真内の番号の場所名が具体的に掲載されている。特に「1. 私の家」とあるため、著者である千々和の実家であることが理解できる。さらに「2. 先祖の墓」「3. 本家」「4. 先祖の社」と千々和自身に関係する場所名の他、旧道や新道、新しい用水、水源地、谷等、郷土の様子を具体的に把握できるような場所名が明示されており、千々和自身が郷土というものをどのようにとらえていたのかが具体的に理解できる。まさに口絵に掲載されている写真は、千々和自身によって撮影された写真であると推察できる。千々和は自分の故郷である木屋瀬町金剛を通して、本書のタイトルである『私達の郷土』をイメージしやすくしようと工夫していると考えられる。千々和の郷土観や郷土に対する思いがこの一枚の写真に凝縮・具現化されているといえよう。

### ②表・図・挿絵

本書が小学生向けに執筆された意図は前述したとおりであるが、190ページ及び書籍でありながら、非常に表や図、挿絵が少ないことに驚かされる（表2、表3、表4）。

表2 使用されている表の箇所

頁	表が挿入されている目次番号と見出し	表 題 名
27	1(5) 誕生地にとどまっている人口	福岡県鞍手郡木屋瀬町金剛小田代組(明治43年現在)
28	1(5) 誕生地にとどまっている人口	福岡県遠賀郡香月町楠橋沖組(昭和7年9月1日現在)
29	1(5) 誕生地にとどまっている人口	東京都目黒区自由が丘旧四四組(昭和23年1月12日現在)
30	1(5) 誕生地にとどまっている人口	出生地別人口百分比(内閣統計57回18頁より算出ス) ※註:手書きの表が挿入されている。
34	1(6) 本籍地と郷土とは、どういう関係になるか	※表題なし 木屋瀬町の本籍人口の百分比 (昭和15年1月現在「町勢要覧」から)
37	1(6) 本籍地と郷土とは、どういう関係になるか	※表題なし 九州地方の炭坑夫出身地調べ
38	1(6) 本籍地と郷土とは、どういう関係になるか	※表題なし 東京第一師範学校男子部附属小学校児童の本籍調査 (昭和22年11月現在)
40	2(1) めまぐるしい移転の生活	東京第一師範学校男子部附属小学校児童出征後住居移動回数表(昭和22年11月末日現在) ※註:手書きの表が挿入されている。
41	2(1) めまぐるしい移転の生活	東京一師男子附属児童入学後住居移動回数
42	2(2) やむをえず転校する子に	※表題なし 福岡県木屋瀬町小学校中途退学児童数 (昭和15年度~22年度まで)
43	2(2) やむをえず転校する子に	福岡県香月町大辻小学校の児童移動状況 ※註:手書きの表が挿入されている。
46	2(2) やむをえず転校する子に	私の家族の住居移動表 ※註:手書きの表が挿入されている。
56	2(4) 夢を追って移転する人たち	市部・郡部総人口対青年人口率(千分比)
58	2(4) 夢を追って移転する人たち	※表題なし 福岡県木屋瀬町・栃木県赤城村・東京都目黒 自由が丘・横浜市鶴見 市場町の人口対青年人口及び人口率(千分比)
59	2(4) 夢を追って移転する人たち	群馬県群馬郡金古町小学校尋常科男子卒業生の町内在住状況調
148	7(2) 炭田地方の人口のうごき	※表題なし 鞍手郡内と木屋瀬町の人口増加(1701年~1947年)
156	7(3) 農耕の生活	※表題なし 稲の脱穀調整能率
158	7(3) 農耕の生活	金剛の耕地と林野 ※註:手書きの表が挿入されている。
164	8(2) 炭鉱業の発展	本邦石炭埋蔵量(単位百万トン)
174	9 協同研究の事例	三軒茶屋の店しらべ(3分団)
175	9 協同研究の事例	世田谷新宿の店しらべ(2分団)

表 3 使用されている図の箇所

頁	図が挿入されている目次番号と見出し	表 題 名
100	5 郷土の拡大	※表題なし 生活の範囲の拡大
101	5 (1) 環境のあらまし	C 近距離移転 D 遠距離移転
132	6 (3) 歴史を経てきた郷土	新田氏系図
133	6 (3) 歴史を経てきた郷土	新田庄関係地図
165	8 (3) 八幡の製鉄所	石炭の生産と人口との関係
167	8 (3) 八幡の製鉄所	八幡市 50 年間の発展 生産額と人口
178	9 協同研究の事例	二子・大山街道略図

表 4 使用されている挿絵の箇所

頁	挿絵が挿入されている目次番号と見出し	表 題 名
48	2 (3) 移りあるいて、郷土をおもう	赤城山の絵
178	9 協同研究の事例	※表題なし 商人とお百姓が物品を交換している様子

表として活用されている内容のほとんどは「人口」の状況に関するものである。また数少ない表の中でも手書きの表として作成されたものが5つもあり、かなり本書の作成が急ピッチで進められていたことを窺い知ることができる。近年の教科書や副読本には図・表・挿絵さらには写真の割合が非常に多く、本書との構成が全く違うことに驚かされる。

千々和は「この本をお読ませになる先生と父兄の方へお願いいたします。この小著をきっかけに、いろいろと話が出ましたなら、どうぞ、お話しあいてになってやって下さい。それは、無形の遺産をあたえてやることであり、現在を自覚させることはもとより、将来のためにまことに尊いものとなるからであります」<sup>4)</sup>と本書の「はじめに」を結んでいる。しかし、本書をどのように小学生が活用したか、その状況が確認できる授業記録等を筆者はまだ発見していないため、実態は不明である。

### ③文章表現及び「問題」の設定

本書は縦書きで書かれている。文章表現は小学生向けには非常に格調高く、現在の小学生を想定するならば、小学生が簡単に読み解くことは困難であるように思われる。しかし千々和は「はじめに」の冒頭で「この本は、皆さんがめいめい、身近な郷土を、ごくたやすく、また楽しく、研究できるように、と書いて書いたものです」<sup>5)</sup>と、本書がわかりやすく、容易に活用できる書としての期待を披露している。また、本書には先に分析したように表・図・挿絵が非常に少なく、また文中の漢字にはほとんど読み仮名が添えられていない。小学生が本書を

手にしたときに、果たして楽しく、郷土を研究したいと思うのかどうか、どういう仕掛けが本書にあるのか明らかにする必要もある。

ここで筆者が注目したのが、本書内に子どもが解決すべき「問題」が設定され、子どもに問いかけ、考えさせる工夫が施されている点である。「問題」は全部で10題出題されている（表5）。

表5 『私達の郷土』における「問題」設定の状況

頁	「問題」が設定されている項目	問 題 文
14	1 郷土とは何か (1) 環境	皆さんも、自分と自分の環境とがどういう関係にあるか、いろいろな実際のことをかぞえて、考えてごらんください。
16	1 郷土とは何か (1) 環境と郷土とは、どちらがうか	皆さんも、めいめいに、自分のクニ、じぶんのサト、自分の郷土はどこだろうと考えてごらんください。
20	1 郷土とは何か (1) 環境と郷土とは、どちらがうか	都市の皆さんは戦時に、疎開しましたね。あのとき、自分の町をどう思いましたか。そのときの気持ちを、静かにふりかえっておもいおこしてごらんください。
41	2 郷土を失える人々 (1) めまぐるしい移転の生活	これらの移動率は、地方や学校によってちがうのであるから、皆さんも先生と一しょに調べてごらんください。そして、附近の都市・農村・鉱山・漁村・山村などと比較ごらんください。するとじぶんの土地の特色がつかめるでしょう。
44	2 郷土を失える人々 (2) やむをえず転校する子に	皆さんの学校の実情とくらべてごらんください。
59	2 郷土を失える人々 (4) 夢を追って移転する人たち	皆さんの市町村の青年人口を調査してごらんください。
59	2 郷土を失える人々 (4) 夢を追って移転する人たち	皆さんも、自分の学校の毎年の卒業生が、どのくらい郷土を離れているか、又、どちらの方にうつっているかを調べてごらんください。
121	5 郷土の拡大 (5) 遠足と旅行―郷土拡大の第三期	皆さんも、遠くいった足せきを、地図の上にあらわしてごらんください。
153	7 農村の研究 (3) 農耕の生活	地割制度は昔、各地でおこなわれているから、研究してみなさい。
155	7 農村の研究 (3) 農耕の生活	郷土の水利灌漑の状況と、その発達とを研究してみなさい。

本書に設定されている「問題」から5つの特徴を見出すことができる。

1点目は、本書に設定されている項目内容の説明や分析を受けるようにして「問題」が位置づけられていることである。必ず「問題」の前にある文章を丁寧に読んで理解しないと、考えたり、深めたり、研究を進めたりすることができないように配置されている。

2点目として表が挿入されているページには「問題」が設定されているケース（例：移住）が多いということである。調べ方等を表として例示することで、子どもの学習の仕方を具体化させようとしていると考えられる。

3点目の特徴は、「皆さんも」、「皆さんの」という書き出しで、子ども（読み手）に話しかけるように切り出し、注意喚起を図っている。その場合の「問題」は、自分を見つめさせたり、子ども自身が自分の学校や郷土を見つめたりできるように活動を促す意図が明確に出ていることである。

4点目として、問題文の文末表現が「○○してごらんないさい」（調べてごらんないさい等）のように、活動を誘発させる緩やかな、子どもから動き出させるような投げかけとなっている点である。したがって想起させたり、本書が紹介する事例のように自分の学校や郷土で調べさせたりしようとする投げかけが多いということも顕著な特徴として見出せる。

しかし5点目は、「皆さんも」、「皆さんの」という書き出しで出題されていた「問題」が、本書の「7 農村の研究」という研究部分に入ると、とたんに「皆さんも」「皆さんの」という表現はなくなり、こういう取り組みがこの郷土では過去に行われていたから、あなたも「研究してみなさい」、というやや強い口調での指示に変化している。またその「問題」には、具体的な研究課題が明示されている。

このように、文章表現にはやや難を感じる本書ではあるが、本書の読み手・使い手である小学生を意識した「問題」の設定は、千々和の本書へのこだわりと同時に本書を通して郷土の捉え方や見方・考え方、学び方の形成を意図して作成されていることに気づかされる。

千々和は「この本には、たくさんの実例をいれておきました。しかし、この実例が皆さんに大切なものではありません。この実例から、どういう考えかたをし、どういうふう考えをまとめたかを知ってもらい、まずこのまねをして、皆さんの郷土に限りなくある事からを、研究していただきたいのです。そうすると、面白みもわき、しまいには、この本よりもよい研究にすすんでいけることでしょう」<sup>6)</sup>と述べている。

本書の役割は、子どもが郷土を学ぶ上での一つのモデルを示すことであり、郷土という社会の見方・考え方そしてこれからの社会の在り方を探究するためのガイド役であると表明している点は、本書をどのように活用していたのかを解明する上での重要な手がかりとなる。

## 2. 『私達の郷土』の内容

### (1) 内容の構成意図

本書はすでに紹介したように9章で構成され、「郷土」の見方、考え方や捉え方、研究の仕方等について丁寧にガイドする社会科の参考書として発刊された。本書の構成において千々和は「どんなに、郷土がひとりの人を生み、そだて、生かしてゆくかを、はっきり、いつわらずに示したかった」<sup>7)</sup>、と述べている。これは

千々和自身が郷土から数多くのことを学び、郷土が自分の人生を決定させていったかけがえのない場所であったことを実感しているからこそ表現できる言葉であろう。

さらに本文冒頭で、「皆さんは郷土という言葉をきくでしょう。それでは、郷土とはどんな所か。わかっているようで、なかなか、はっきりしない言葉だとは思いませんか。一つ、これからどんな所を郷土というのか、また、郷土というものは、私たちが生きてゆくのに、どんな大切な意味があるのか、なお、郷土を研究するにはどうしたらよいのか、こうしたことを、よく考えてみようではありませんか」<sup>8)</sup>、と千々和は読者（子ども）に問いを投げかけている。この問いは本書の構成における核となる視点であり、郷土研究をすすめる上で極めて重要な方向づけであり、観点となる。

## (2) 「郷土」の概念とその内容展開

第1章にあたる「1 郷土とは何か」は、本書の基盤となる重要箇所である。つまり曖昧かつ不明確で説明しづらい「郷土とはどんなところか」という問いかけに、千々和は「自分の心の中に深く覚りとった環境、すなわち自覚された環境を、郷土とよぶのである」<sup>9)</sup>、と明確にその見解を披露している。ここでいう環境（「魂の故郷」と千々和は呼ぶ）とは、単にすでに離れてしまった過去の環境（故郷・郷里）のみをさすのではなく、「自分はこの環境とはきっても切れぬ関係がむすばれているのだ、この環境のおかげで自分は生きているのだ、自分はこの環境と一体となのだと気がついて、この環境に懐かしさ、したわしさ、親愛の情や、感謝の心がわいてきた時に、その環境は、自分の郷土となっている」<sup>10)</sup>、とさらに説明を加える。そして、すでに離れた故郷だけでなく現在自分が住んでいる環境へも親愛の情や感謝の心を持つことができれば郷土として自覚すべきであるとして、誕生地や本籍との関係からも実例（福岡県鞍手郡木屋瀬町金剛を中心とした比較事例）を分析しながら「郷土」の概念を丁寧に論じている。その概念を支える論理は「郷土は、自然をもとにして人が文化をつくった、一つのまとまった社会である」<sup>11)</sup> という考え方である。人間が生活する環境には、自然的条件と人間が創り上げた人文的条件の両面があり、その環境条件に合わせ、環境を生かしながら、より豊かで快適な生活を営んできた人類の歴史は、まさに郷土で育まれたものなのである。

そして本書ではこの概念を基盤にして、さらに昭和23年当時の社会状況として起きていた人口移動の問題（「2 郷土を失える人々」）を取り上げ、現在住んでいる場所を郷土として自覚できるようにする（「3 郷土の建設」）ために、郷土に対する研究姿勢とその方法を示す。続いて幼いころの郷土での生活を、明治、大正、昭和とそれぞれ違った時代に生活した人々へのインタビュー等によって紹

介（「4 郷土の思い出」）をしたり、千々和自身が生まれ故郷で過ごした経験を生活空間の変化・広がり（「5 郷土の拡大」）という観点から紹介したりして、親愛の情や感謝の心を如何に培っていくか、という事例を明示している。

### （3）「郷土研究」の方法論

「6 郷土の研究」には、「郷土」の研究のはじめ方や進め方等、その具体的な内容の観点が示されている。

#### ①どこから研究をはじめるか

郷土の研究は、「手近なことに頭をはたらかして、観察することからはじめればよい」<sup>12)</sup>と明示されている。それは高尚な学問とされる地理学・経済学・社会学・生物学・鉱物学等の種々の学問は、すべて目の前の郷土にある事象等から組み立てられており、目の前にある事象から論理を導き、またその事象で証明していく道筋であり、郷土の事象に対峙し分析・考察していくことが学問研究の本道であると考えているからである。その主張は次のような言葉で一層強調されている。

「ごく手近にあることから高遠な学問にはいってゆき、そこからまた手近なことにかえってこなければならぬのが学問であり、郷土の研究も世界をつらぬく学問の出発点であるとともに、その学問の理論を証明するためにも、また、実際に応用するためにも、郷土の研究にかえってくるものである」<sup>13)</sup>。郷土研究が学問の出発点であり、学問の終着点であるとする説明は、郷土を研究する必要感を高めるとともに、郷土を研究することの意味や意義を明確に読者（子ども）へ伝えようとする、いわゆる積極的理解を促進させる表現として注目したい。

また、「目に見え、耳に聞こえる郷土のものごとは、無限に多いから、研究するには、まずいくつかの方面にわけて、その一つ一つからかからねばならない。そして郷土をみつめているといろいろな疑問がわいてくる。こうなるとしめたものだが、どうしてもわいてこないときは、先生におねがいしなさい」<sup>14)</sup>と書かれている。自分の関心のあることを焦点化する必要性と、素朴な疑問を大切にすることの重要性を指摘している点は、今でも共通する点である。しかし生活している郷土の、ある特定の事象や分野を限定することは、子どもの視野を狭くする場合もある。郷土社会の中に身を置き、広い視野から事象を眺めながら素朴な疑問や知的好奇心を喚起させていく必要性を感じる。

さらに、子どもの学びの視点として「郷土研究のうちわけ」（表6）を観点として提示している<sup>15)</sup>。

表6 郷土研究の観点

郷土研究のうちわけ	
1. 郷土の自然	
(1) 地形	①標高②地域の形状－高知と谷と平地－風景③地形と境界
(2) 地質	①地質②火山と温泉③鉱物資源 1) 鉱物の種類と分布 2) 鉱物の開発状況
(3) 水系	①水流と水源②地下水③湖水・沼沢・池④水系と人文との関係
(4) 海岸	①海岸線②湖汐・海流・波浪③海岸状態と人文との関係
(5) 気候	①天気の観測②気候の区画③気候と自然および人生との関係
(6) 土壌	
(7) 動植物	①原生動植物の種類と分布②住民と動植物との関係
2. 郷土の人文	
(1) 産業と経済	
①農業	1) 変遷発達の概観、生産額の増減 2) 経営の型、作物の種類と栽培面積、土地の分配 3) 農耕機具 4) 開拓と灌漑 5) 牧畜 6) 副業 7) 労働力の過不足 8) 市場と集散状態、農業会供出割り当
②林業	1) 変遷発達の概観、生産額の増減 2) 樹木の種類と栽培状態、労働力、運ばん、3) 副業及び農業・工業との関係 4) 市場と集散状態
③水産業	1) 変遷発達の概観、生産額の増減 2) 水産物の種類及び飼育と漁用具、労働力 3) 副業及び農工業との関係 4) 市場と集散状態、供出
④鉱業	1) 変遷発達の概観、生産額の増減 2) 鉱物の種類と採掘方法・機械器具・施設、運ばん、3) 鉱業中心地と他の産業地域との位置関係－労働力と鉱業集落 4) 市場と集散状態 5) 他の産業および人生への影響
⑤工業	1) 変遷発達、手工業・家内工業・機械工業・産業革命 2) 工業の種類 3) 工場経営の型－位置・原料・機械・動力・労働力・運ばん・資本・規模・生産額など 4) 市場と集散状態－地方の発展・工業集落 5) 新興工業 6) 資本主義経済と労働問題
⑥商業	1) 変遷発達の概観、市場の発生、地方の貨幣、藩札、切符 2) 配給所と配給範囲、自由販売 3) 商業の大小中心地（田舎の店、町・市）と商品の種類、商圈との関係 4) 各商業中心地たがいの競争関係 5) 地方と中央との商圈所属関係 6) 商工会議所、物資の統制
⑦交通、運輸、通信	1) 変遷発達の概観 2) 交通運輸の機関 3) 通路と施設 4) 通信機関の施設 5) 交通・運輸・通信の量
(2) 人口	
①戸口の増減	
②人的資源と経済活動	

- ③土着と移住、人口の増減
- ④住民の分類－年齢・生業
- ⑤衛生
- (3) 郷土と集落社会
  - ①郷土社会の成長
  - ②郷土と共同社会の範囲（集団の型）
  - ③家族－系図、家族の構成と生活
  - ④村落－農村・漁村・山村・散村と集落など
  - ⑤都市 1) 都市の発生 2) 都市の型－政治・経済・交通・宗教・学芸などの何を中心として成立しているのか 3) 都市と田舎の関係－消費者と生産者
- (4) 政治
  - ①政治区画、為政者の変遷
  - ②役場および官庁
  - ③自治組織と各種団体
  - ④地方の制度
- (5) 生活文化
  - ①古い伝統的生活と新しい生活
  - ②生活程度－衣食住の地方差・風俗
  - ③方言
  - ④教育－学校・図書館・教化団体・偉人・民風・習俗
  - ⑤宗教－神社・寺院・教会－宗教団体
  - ⑥芸術－芸術家・芸術団体・国宝美術・民芸
  - ⑦娯楽
  - ⑧生活改善の運動
  - ⑨郷土のうるおい・国宝・史跡・名勝・天然記念物の保存・偉人の顕彰
- (6) 過去を説明するもの
  - ①史跡と遺物②古く書かれたもの（史料）－碑文・古書籍・古文書・古記録・古絵図③伝説④偉人の恩恵⑤郷土史年表

## ②郷土研究の進め方

郷土研究を進めるにあたって、本書ではさらに参考書及び資料の活用方法についても明示している<sup>16)</sup>。その方法を整理すると下記のとおりである。

- 1) まず大切なことは郷土の研究対象項目が上記のように非常に広いため、研究の仕方としては、どの分野も共通なこととして、实地観察や踏査、採集等を中心に据える。
- 2) 関係の専門的文献や「府県誌・郡町村誌」のように簡単にわかりやすく記された郷土関係資料を読む。尚、これらの文献が作成された時代やその背

景が現在とは違うため、考え方や研究の進め方には十分注意し、むしろ研究材料を得る資料とすること。

- 3) 史蹟・名勝・古社寺・国宝・偉人などについては、解説や案内記を有効に活用する。
- 4) 郷土雑誌を活用する。(例えば群馬県『上毛及上毛人』、埼玉県『埼玉史談』、東京『武蔵野』、長野県『信濃』等)
- 5) 師範学校の郷土室、郷土博物館を参観し、説明してもらう。
- 6) 郷土研究会の研究会や座談会、見学旅行へ参加し、研究者から直接指導してもらう。

尚、注意点として、以上の研究に取り組む前には、必ず学校の先生方からの指導を受けてから取り組むと「間違いも少なく」なると提言する。また友達と一緒に掛けて研究に取り組むと「張合いも出てくる」として、事前準備をしっかりともの見方や考え方をしっかり作ってから研究調査することの大切さを強調している。

#### (4) 「歴史をもつ郷土」という見方・考え方

本書は、既に述べたとおり全国師範学校歴史教育研究会が編集している。そのため、自然的条件・人文的条件を取り込む「歴史」というアングルから構成されていることが特徴である。「歴史のない郷土はない」<sup>17)</sup>という小見出しがつけられたり、事例を通してどんな場所にも見方を広げたり変換させたりすればその場所の歴史が見えてくるとして、楠木正成の金剛山(大阪府)ふもとの段々畑の開拓例や、新田義貞一族による新田荘(群馬県)の開拓の例、さらには千々和が個別にインタビュー調査した扇谷修(北海道)からの寄稿文「歴史をもつ私の郷土」(浜益村の開拓の歴史とアイヌの生活)によって具体的に紹介されている。これらの事例はすべて「開拓」という視点から論じられているものであるが、千々和の関心は人口や人の移動という郷土における人の存在を常に意識し問題視している点にあり、その出発点には開拓に代表されるとおり、「人はその場所にいつから住みはじめたのか」という問いに凝縮されるのである。この問いは千々和にとって郷土研究を進めるにあたっての中核的な問題であり、郷土研究の視点として重視されていると判断できる。

したがって、本書「6. 郷土の研究」では、開拓事例のあとに、「わが郷土にいつ人が住みはじめたか」、「人は生活の跡をのこす」、「住居に選ばれる所」というプロットがたてられ、問題解決に向けての方法的視点を提示している。千々和が人の動きに着目して郷土研究を進める方法やその信念は次の記述からも理解できる。

「私たちがここに住居をさだめているが、それにはそうできる条件が、ちゃん

とそなわっていないてはならない。すなわち住居ができるような社会が、前からここにあったのか、それとも、わたしたちの先祖なり父母なりが、はじめてここにやってきたのであるか、などがそれである。これを研究しないと、どういうふうにここが郷土となったかがわからない。そのあとで、ここがだんだん開拓され、住みよくなり、よりよくなった順序を調べると、面白くもあり、これからここをどう発展させていったらよいか、などの見とおしもわかる人となれよう<sup>18)</sup>。

#### (5) 郷土研究の事例

そこで、千々和は郷土研究の具体的取り組みを2つの事例から紹介している。

##### ①事例1：「農村の研究」

まず、第1事例として「農村の研究」を紹介している。千々和の郷土研究の具体的方法は「7 農村の研究」「8 郷土の石炭と製鉄」として本書で紹介されている。千々和の出身地（本稿では郷土）である福岡県鞍手郡木屋瀬町の大字金剛がその対象事例（事象）となっている。プロットを追うと研究状況が概観できる。

「7 農村の研究」は、(1)農村の人口のうごき (2)炭田地方の人口のうごき (3)農耕の生活－①農具 ②灌漑と協同 ③農村の機械化の歴史、の3つの観点から構成されている。千々和の幼少期の体験や経験をもとにしながら、今日の大字金剛の状況を詳細に考察し、課題提示をしている。また「8 郷土の石炭と製鉄」においては、(1)日本最初の炭田地 (2)炭坑業の発展 (3)八幡の製鉄所、という順で論が進められている。千々和の郷土である大字金剛が日本における炭坑の起源であり、近代文明が石炭を母体として発展してきたこと、そして日本の進歩には炭坑業の発展が欠かせないものであることから、千々和は大字金剛という郷土に対して計り知れない誇りと、戦後の石炭と製鉄の衰退による生活状況の変化という憂い、という両面から考察する郷土研究を紹介している。郷土の見方・考え方を培う上で多面的・多角的な視点から考察する必要性を表明した点において大変参考となる事例といえよう。

##### ②事例2：「郷土世田谷」

本書の最終章にあたる「9 共同研究の実例」には、東京第一師範学校男子部附属小学校教官の山崎幸一郎による「郷土世田谷を学ぶ子どもたち」という実践記録が2つ目の事例として紹介されている。本書における学校での実践例としては唯一の授業記録である。どのような単元構想で指導された授業かは不明だが、紹介されている授業は、本単元のまとめ段階に位置づけられた授業（1時間）<sup>19)</sup>であり、社会科創設期において郷土教育がどのように実践されていたかを解明する上で貴重な資料といえる（資料1）。

資料1 東京第一師範学校男子部附属小学校第4学年社会科の授業記録（抜粋）

（註：本資料は授業の様子を明確にするために、筆者が山崎の報告内容をもとに整理及び作成した。）

学習課題の提示：

1.（教員）「今までの学習のまとめとして分団ごとに発表しよう！」

（1）第一分団の発表—「紙芝居：『世田谷の発達—領主と領民』」

①紙芝居を読む。

（芝原）「ぼくたちは、世田谷の城下町を中心にして研究を進めました。それで、その発展の様子を紙芝居にしました。」

【紙芝居の内容（抜粋）】

（絵は、田園のかなたの世田谷城）

「世田谷の烏山用水を外濠（とがうら）とした、ちいさなお城がありました。そばには、そのお城の持主の吉良氏の立てた弘徳院（今は豪徳寺）というお寺もありました。けれども世田谷の城下町には家がとても少なく、一件一件数えられるくらいでした。吉良の殿様は、そんなすくない領民でも楽しくらせるにはどうすればよいか、世田谷をさかんにするにはどうすればよいかと毎日考えていました。」

「吉良氏の家来が木のきり株にのって大声で村の者をよんでいます。（村人が数人いる）」

『みんなよくきけ、お殿様のおふれだ、村の者はやくきて聞きなされ。』

『なんだろう、いってみよう。』

『なんですか、なんですか。』

『みなのもの、しずまって、よく聞きなされい。今度の月から、一と六の日には楽市というものを開く、これはみんな、だれでも自由にどんな商売をしても、けっして税などはとらない。けれども、おし買いや乱暴をしてはいけない。そのことをみんなにつたえておけ』

「（村人がかえり道で話をしている）『ありがたい、ありがたい。わしたち領主は、とても親切だ、楽市なんていうものをつくってくれて。』

『なにに、楽市だと、楽市とはどんなこと。』

『知らないの。楽市というには税などもいらなくて自由にできる市のことさ。今、どこの国でもはやっているのは、税をとられ、だれでもやたらにできない不自由な座という組合だよ。』

『そうか、そうか。それはありがたい。さっそく仕事をみつけよう。』

（中略）

「（家のいっばいたった上町の街道）いつの間にか、宿は町になりました。領主も領民をだいにするので、領民はよく領主につかえました。こんなによい町にした吉良氏のりこうさは、そうぞうもつかないほどです。」

②質疑・応答

※2・3の質疑と応答があったと記載されているが詳細は明記されていない。

（2）第三分団の発表—「三軒茶屋の商店研究」

○「三軒茶屋の商店街の図と商店の分類表」提示（黒板に貼る）

①問題提起

（福島）「私たち三分団は三軒茶屋の街道にそった商店を研究しました。それによりますと、この表のように商店だけでも119軒ありました。三軒茶屋の歴史を調べますと、江戸時代の中頃よりも少し前ごろ（年表で1700年ごろをさす）お酒と飯を売る店が三軒あったので、三軒屋といったそうです。江戸時代の終わりごろには商店ではなく、農家が十数軒ぐらいあったということをこの本でみしました。それが今は商店だけでも119軒あります。ぼくらの分団では、どうしてこんなに開けたかが問題なのです。これは、同じことなのですが、さっき一分団から世田谷の発達について紙芝居がありましたが、あのままていくと、世田谷城のまわりがどんどん開けるのは本当だと思うのですが、三軒茶屋の周りが開けているということはどうしてもわかりません。皆さんも一しょに考えてください。」

※アンダーライン部分が「問題提起」

②質疑

(間瀬)「ぼろ市との関係はどうなっていますか」(第五分団)

(3) 第二分団の発表—「ぼろ市研究」

(※問題提起に対する視点づくりとして、関連するぼろ市研究をしていたため指名されて研究内容を発表する。)

①説明する

(奥野)「二分団で、ぼろ市の出る道にそった家をしらべましたが、商店が52軒、その他が64軒です。それから、ぼろ市のたつところですが、昔は世田谷下町にも多く市がたつのですが、西の上町のほうがよく売れるので、だんだん市の立つところが西の上町のほうによっていって、今では、上町と、さらにその西の方(三軒茶屋は神吉町より東方約2キロにある)を中心にして、市がたちます。これは、ぼろ市ではおもに農家に関係のふかい品が売れるので、農業のさかんな西の方へ、だんだん市がよっていったのだそうです。」

②質疑応答

(渡辺)「むかし、戦争などで方々から逃げてきた来た人が、びくびくしながら野原にすんでいたが、そのうちに大丈夫だろうというので家をたて、それをまねて、われさきに家をたてた。ところがこれでは食べていけないというので、商業をはじめたのではないかと思います。」

(内山)「それに戦争がおこって、世田谷城のそばからみんな逃げてきて、三軒茶屋に家をたてたのだと思います。」

(水谷)「しかし、家をたてて店を開いても、売れなければだめだと思います。ほくが聞いたことによると、三軒のお茶屋があって、そこの店でサービスをしたので、みんなが喜んで集まって来たという、うわさのこっています。」

(河西)「お茶屋がたいへん繁昌したので、店屋が多くなったと思います。」

(藤正)「ほくは、いつか三軒茶屋の道しるべのところ、先生におしえていただいたのですが、この街道を、大山さまへおまいりにいく人が、おそなえを持っていく。その人が多いから、よく売れる。それで店が多くなったのだと思います。」

(4) 第五分団の発表—「街道の研究」

(※藤正の意見を受けて街道研究をしていた第五分団が指名発表する。)

○「二子道・大山道を中心にした街道図」提示

①説明する

(佐々木)「この二子街道も大山街道も、地図にはふつう、どちらも大山街道とか、厚木街道とでているようです。それでこの二子街道を調べてみてまず発見したことは、道がとても曲っていることです。これは前にも発表しましたが、世田谷城に攻めてくる敵に、とおまわりさせるためだと思います。それから歩いてみると、道のわかれていところに、たいがい古い道しるべがありました。これは若林の近くの古い家のおばあさんに聞いたのですが、二子道は、足利時代のはじめのころにできたのです。それから一つ、おもしろい、思ったことは、二子道は大山道と用賀で出合うので、どっちが近道か地図ではかってみたら、三軒茶屋から用賀まで大山道は約3700メートル、二子道は約4000メートルで、大山道の方が約300メートル近道ということがわかりました。それではじめに、二子道は遠まわりで、むだの道のように考えたのですが、そうではないことに気がつきました。第一分団の紙芝居の発表にもありましたが、この道は吉良氏が商業を盛んにし、世田谷の発達を考えてつくった道です。このような大切な道なので、ほくたちはもっとよく研究しようと思います。」

(間瀬)「ほくたちの分団は、三回ほど街道の実地調査をしました。ある日は雨がしとしと降り出して、手がかじかんで写生なんかできなくなったり、げたも切れて一そうこまり、やお屋さんですげてもらって、前進をつづけました。それで、ほくのおもしろいと思ったことは道しるべで、どの道しるべの上にも直径8センチぐらいの穴がたくさんあいていることです。その穴はお祭りなどに油を入れて灯をともしたのではないかと考えています。」

それから道しるべには、みな年号がしるしてあって、『延享』とか『文化』とか『文政』『天保』などと書いてありました。これは先生の本でしらべると、みな江戸時代中期から後のものだということがわかりました。これも道しるべから、わかったことなのですが、どの道し

るべにも、たいがい、お不動さんか、先生にうかがったのですが、ぼん字が書いてあります。で、これは藤正君の発表にもありましたが、神奈川県の大山さまが、お不動さんで、江戸時代の中頃から、江戸の人がさかんに、おまいりしたのだそうです。

百科辞典でしらべたのですが、むかし江戸の人が大山におまいりにいく時には、はじめに両国川で体をきれいにし、白い着物をきていったそうです。この大山まいりについては、小林君が毎年おとうさんと一しょに大山へ豆まきにいらっしゃるそうですから、あと小林君にかわりたいと思います。」

(小林)「ぼく大山について、しらべたことをお話しします。大山へのぼって、いつもいってとまるところから 200 メートルばかり先にいくと、七不思議とかいてあるので、お父さんに聞いたら、この山に七つの不思議があるのだそうです。そこで、のぼりながらさがしたら五つあります。その一つは一夜に坊さんがつめでぼったという石のおしゃかさま、だい二はも一つのおしゃかさまで、たとえば、吉田君が自転車を買ってもらいたくてたまらないとき、そのおしゃかさまにたのむと、ねがいがとおるといのです。それから、大山のかみさまと富士山のかみさまとは兄弟だということもききました。だい三は、りょうべんの瀧であって、有名だそうです。だい四は、弘法大使がきて水がのみたいといって杖を一つさしたら、そこからわき出たという、きれいな清水、だい五は、三面大黒といって、ふつうの大黒さまの耳のところに顔が二つついています。そして僕も三つおいて、その上にすわっていました。あとの二つはさがせませんでした。」(阿夫利神社の札、大山寺の豆まきに使ったますを提示)

## 2. 問題提起に対する仮説の整理及び解釈

(教員)「藤正君がいった三軒茶屋の発展のわけは、『大山まいりがさかになって、そのお供えものを買った』からではないか？」

(佐々木)「大山まいりにいく人たちが、いろいろなものを大山さまにささげるので、買うからだと思います。」

(芝原)「三軒茶屋でお供えものを買うよりは、できるだけ大山の近くで買う方が、便利だと思います。」

(矢島)「ほくもお供えものではないと思います。それは、福島君のお話にもあったと思いますが、大山まいりにいく人たちが、三軒茶屋でお休みしたのではありませんか？」

(奥野)「ほくも矢島君のいったことに賛成です。しかし、お休みどころなら、何も三軒茶屋でなくても、ほかでもいいのではないですか。」

(杉原)「それは電車で便利だから。」

(水谷)「三軒茶屋は大道路で、便利だからではないでしょうか。」

(石田)「わかりました、それが渋谷の方から旅をしてくと、下高井戸の方面にいく道と、玉川方面にいくのが、三軒茶屋で分かれるので、ここで一時やすむのに都合がよかったのだと思います。それで皆あつまって町になった。」

(間瀬)「よくわかりました。もう一つさっき発表しなかったことがあります。地図をみるとわかるとおり、大山街道で、むかしは渋谷と二子に宿があって、三軒茶屋はちょうど、そのまん中ごろにあたっています。それで、三軒茶屋はお休みするの一番よいところだと思います。」

## 3. 事象の特色及び関連についての議論

(渡辺)「さっき内山君が、戦争のために、皆が世田谷城のそばから逃げてきて、三軒茶屋にうつったのではないかといいましたが、ほくもそう思っているのです。これはどうなりますか。」(新たな問題の提起)

(芝原)「それは世田谷城がなくなってしまったからです。分団で吉良氏の表をつくってありますが、北條氏が小田原にいたころまでは、世田谷城に吉良氏もいたようですが、後によその国へうつりました。江戸時代に、吉良氏朝が世田谷城近くの実相院に隠居していたといわれますが、そのときには、世田谷城はもうなくなっていたのではないかと思います。城下町の中心になる城がなくなってしまったのですから、それで世田谷の新宿も元宿も、あまり発展しなかったのです。」

(中島)「それではなぜ、ほろ市が今でも残っているのですか。」

(奥野)「これは竹川さん(上町の古老)に聞いたのですが、今のほろ市とちがってきている

そうです。まず第一に、昔は市の日が月の一と六だったのに、今は12月と1月の15日と16日だけです。数えてみると、昔は、31日をぬくから、6日、年に72日市を開いたことになりませんが、今は年に4日です。二番目は、市に出る品物で、昔は、わらじ、ぼろ、むしろ、農具、お正月の時にはお祝いのもなどが主であったそうですが、今はふつうの市と同じようになったとききました。一と六の日がやめられて、今のようになったのは、いつごろであるか、はっきりわからないそうですが、先生にうかがうと、江戸時代の『文政』の頃には、もう一、六の市ではなかったようです。そうすると世田谷城のあったころの市と、城がなくなつてからの市とは、ちがうと思います。」

(中島)「わかりました。」

(奥野)「あの、それから、これも竹川さんから聞いたのですが、どうして、ぼろ市が12月と1月だけになったかという、農家が一年の収穫をおわって、お金のできるのは、この12月と1月にかけてだそうです。そして、お百姓さんは、ぼろ市にいけば、農家にいりようなものは何でも、そして安くかえるので、市にきて、一年分のいりようなものを、まとめて買って行くのだそうです。それから、竹川さんたちが、前に、このぼろ市を昔のように一と六の日にひらこうと、ずいぶんほねをおったが、どうしてもだめだったとおっしゃっていました。」

(佐々木)「それに、さっきも発表したのですが、大山さまにいくのには、世田谷の新宿をとおると遠まわりになりますから、その方にはあまり旅人もいかないで、みな三軒茶屋から駒沢をとおる大山街道を歩いていってしまったのだと思います。」

(渡辺)「よくわかった。」 (※みんなに問題を投げかけた児童)

(福島)「どうもありがとう、よくわかりました。」 (※一番はじめに問題を出した児童)

#### 4. 新たな問題の発見と学習課題づくり

(藤正)「さっき杉原君が、電車が便利だから三軒茶屋がひらけたといいましたが、それもあるとは思います。ぼくは電車ができたので、かえて三軒茶屋があまり発展しなくなったのではないかと思います。どうしてかという、何か買ひものがあれば、渋谷や下高井戸などで買ってしまおうし、電車にのっていれば、三軒茶屋でお休みすることもいらないからです。それから、小林君。君は毎年大山さまにいくといいましたが、何線にのるの。」

(小林)「小田急」

(藤正)「そうすると、今の三軒茶屋は、大山まいりにはもう必要はないんでしょう。」

(福島)「そうすると、三軒茶屋はもう発展しないことになるのですか。」

(矢島)「福島君は、三軒茶屋の商店をずうっとしらべていたのでしょうか。ぼくたちは前から学校のまわりの、商店でない家をしらべていましたが、このへんには会社などにかよう人がとても多いと気がつきました。それで、藤正君の意見でわかったのですが、三軒茶屋はこれからの商店の町では発展しないが、会社にかよう人の町なら、どんどんひらけるとは思います。」

(福島)「わかりました。しかし、会社の人たちの家が多くなれば、また配給所もできるし、いろいろな商店もできるではありませんか。」

(矢島)「それはそうですけれども、どちらが主になるかといえば、ぼくは会社の人たちの家だということです。」

★詳細な記録はないが、その後、歌田という児童から「三軒茶屋は住みいい」という発言が出され、これをもとに新たな学習課題2点とこれからの取り組みについて全員で決定したと報告されている。

①「三軒茶屋は住みいい」のか、ということ考える。

②三軒茶屋から世田谷全体を考える。

方法：区役所で区全体の様子を調べる。

#### 2) ぼろ市を見学する

(※本授業が12月に行われているため、ぼろ市の様子が実際に見学できるタイミングとなる)

#### (6) 事例2「郷土世田谷」に対する授業評価

「郷土世田谷を学ぶ子どもたち」と題して報告した山崎幸一郎の授業記録内におけるコメントや分析発言は、昭和22年～23年にかけて実践されていた郷土教育の状況を把握する上で参考となる。

「おわりの協議は、みじかい話合いではあるが、三軒茶屋の今までのことばかりでなく、これからの問題としても、本当によいことを考えついたと思った。また皆に、一つの町の発展してきた姿がはっきりすると共に、さらに、この町がどのような姿に発展していくだろうかと見つめることができたので、本当に愉快になった」<sup>20)</sup>。

本コメントは、山崎が報告の冒頭に示した郷土教育の意義や価値を確かに証明できたことをアピールするものである。すなわち、冒頭で「私がここで記したいことは、郷土に学ぶ小学生がどのように自分たちの問題を発見し、どのように自分たちで解決していくかという一つの姿であり、また逆にいえば、小学生の積極的な興味と研究心で理解されていく郷土の生きた一断片である」<sup>21)</sup>、と表明したことを証明するものである。郷土を学ぶことは、まさに社会科が目指す授業像を具体化することができ、「郷土世田谷」の取り組みの成果は、山崎にとって大変満足いく「本当に愉快になった」結果だったと判断できるのである。

また目の前の子どもは「いまの東京という、特別な郷土社会に住んでいるが、郷土社会と生活との切実な結びつきを、しっかり意識しており、よそと同じように、これを強く愛しているのである」<sup>22)</sup>と郷土教育への期待を述べる。そして「この社会の研究をどんどんやって、だんだん、この社会を、もっともっと、よくしていきたい」<sup>23)</sup>という4年生の子どもの感想文を披露することを通して、郷土教育がよりよい社会づくりに貢献できる子どもの資質・能力を育成し、社会科推進には必要不可欠な教育であるという強い決意を表明している。

なお、全国師範学校歴史教育研究会では「社会科は、学級のみinnでなかよく力をあわせて、研究するものである。一人でやることもたいせつだが、みんなで手分けしてやれば、その成果はさらに大きい」<sup>24)</sup>、と訴える。そのため本授業はまさに子どもが協力しあった研究であり、「一つの町の発展してきた姿がはっきりすると共に、さらに、この町がどのような姿に発展していくだろうかと見つめることができた」ことは、山崎にとって郷土研究こそが社会科の中核であることを確認できた極めて意義深い実践であったと推察することもできる。

### 3. 『私達の郷土』と郷土教育

#### (1) 郷土教育の考え方

『私達の郷土』の「はじめに」において千々和は、「むずかしい本を読んで、奥ぶかい理論をしらべてゆくことも大切ですが、まず、わたくしたちの郷土の生活

を、よく注意し、観察して考えてゆくと、そこからしぜんに、奥ふかいことが、はっきりわかってきます。今まで、わたくしたちは、いきなりむずかしい書物をよみ、遠くのほうに気をとられすぎて、自分のまわり、そのおかげで自分が生きていられるもと、こういう大切なことを、うっかり見おとしてきました。そのために、学問もほんとうのものにならなかったのです」<sup>25)</sup>、と郷土で学ぶ意義と郷土研究の必要性を自戒の念を込めて主張している。

そもそも郷土を教育に結び付けるようになったのは19世紀後半のドイツに起因する。産業革命による経済的・社会的変化に伴う近代化の流れに対して、地方的・郷土的なものに独特の意味を見出し、反近代化、反都市化の象徴として「郷土芸術」や「郷土教育」という新しい思潮が起きたからである。明治から大正、昭和初期にかけて、日本でも西洋近代化や都市化に対する反動から地方や土着のものへの関心が高まり、地域や伝統の再発見がなされる中で「郷土」という概念がドイツの影響を受けながら定着していった。特に昭和恐慌による深刻な農村疲弊、学生による左傾化、農村における小作争議の頻発等に対して、文部省が農村の事物・生活習慣等を媒介にして国民としての一体感や愛国心を認識させようとする意図から郷土教育が推進されたのである。1930年代後半にはいったん下火となったが、1941年の国民学校令下において5・6年生の国民科地理・国民科歴史の基礎として、4年生に「郷土の観察」という科目が設けられ、郷土教育が国民学校期における正規の科目として位置づけられることになる。当時の教師用指導書では「郷土の観察」の目的を「郷土における事象を観察させ、郷土に親しみ、郷土を理解し、これを愛護する念に培ふこと」<sup>26)</sup>としている。つまり「郷土」は「皇国の一部で、わが国土の縮図」であり、「郷土の事象を観察把握することは、やがてわが国土国勢の具体的な理解に資し、国史の一環としての郷土の認識に資せしめる。郷土愛の啓培は国土愛護の精神に拡張し、皇国の使命の自覚に昂揚される」<sup>27)</sup>とした。戦後の社会科創設期の『私達の郷土』に代表される郷土研究の展開は、「郷土の観察」の目的を継承する教育として、また新たな日本という国家・社会を形成する市民を育成する上で必要不可欠な教育であったと理解できる。

## (2) 社会科創設期の教科書と『私達の郷土』

社会科は昭和22(1947)年5月5日『学習指導要領社会科編Ⅰ(試案)』、同年6月22日『学習指導要領社会科編Ⅱ(試案)』を受け、他教科に遅れること半年、同年9月2日より授業が開始された。既に社会科の授業が開始される前年の昭和21(1946)年9月には梅根悟らが指導する川口市新教育研究会が発足し、また同年12月には桜田小学校が東京都の実験学校に指定され、翌年には川口プラン、桜田プラン等が発表された。また戦前より新教育の実践やカリキュラム編

成で多くの業績を上げてきた奈良女子高等師範附属小学校や明石師範附属小学校等も次々と教育プランを発表し、社会科授業に対する期待と模索が続いていた。

さらに「試案」の発表を受けて講習会やブロック研修会、各県の伝達講習会も行われ、全国で社会科授業のスタートに備えた<sup>28)</sup>。しかし、「試案」では具体的な教育内容が示されず、しかも教科書も講習時には刊行されていなかったために、新しい教育理論に基づく社会科に対して、現場教師の戸惑いは非常に大きかったという。実際、教科書は授業開始直前の8月25日に小学校第6学年『土地と人間』（文部省著作教科書：日本書籍）の一冊がなんとか発行されたにすぎない。本教科書の末尾には「教師及び父兄の方々へ」という附録がついており、その中で教科書は参考書として扱うと記されている。この背景には、教科書中心の従来授業に対して、新教育では子どもの自律性や生活経験を重視し、教科書以外の教材を用いることが奨励されたためである。教科書が参考書であるという考え方は、従来国定教科書とは全く異なる教科書観である。そのため川口プランや明石プラン等に代表される全国的な動きとなっていたコア・カリキュラム運動の強い影響を受け、模倣的な授業が展開されたことは否めない。またそれが流行となり、社会科はコアでなければならないという錯覚を招くことになった。文部省は全年の教科書整備を急ぐとともに、授業開始1年後の昭和23（1948）年9月15日、文部省は『小学校社会科学習指導要領補説』を刊行し、社会機能法に基づく単元計画の指針を示すことになる。これによって現場教師の社会科への取り組み方が大きく前進することになる。

授業開始から一か月経った9月末までには、小学校第5学年『村の子ども』及び中学校第1学年『社会科1 わが国土』、第2学年『社会科7 世界の諸地域の自然と農牧生活』、第3学年『社会科13 文化遺産』が一冊ずつ発行された。また『私達の郷土』が発行される昭和23（1948）年12月10日までには、小学校では第1学年及び第4学年を除く学年の教科書が整備された<sup>29)</sup>。当時の小学校の社会科教科書の特徴は、同世代の子どもが主人公になって、社会生活の中でさまざまな社会施設や設備にふれて、社会生活を経験していく一つの参考事例集的性格をもつものであった。

文部省の教科書が、一つの参考事例集としての編集特色を備えていたことを鑑みると、同時期に全国師範学校歴史研究会が自主的に発刊した『私達と郷土』は、参考書としての編集方針は共通するものの、現場教師が新教育への意識と意欲をもち、戦前における教育研究の成果や課題を踏まえながら、戦後の社会や子どもの状況を勘案して作成した、社会科推進には必要となる教科書的存在だっただのではないかと推察できる。なぜなら前述したように、本書は新教育としての考え方を如何に具体化させるべきかを提案したモデル的授業の要件も備えており、社会科の混迷期・不安期・混乱期の打破に向けて一石を投じる教科書の価値を具備し

た刊行物であったと考えることができるからである。

### (3) 社会科創設期における郷土教育の位置

創設期の社会科は、社会の進展に役立ち尽力できる力を育成するという、現実の社会に適応し奉仕する人間を育てることにあり、長い間の絶対主義教育に縛り付けられた国民にとって日本の暗い現実を切り開いていく教科として歓迎された。そのため子どもが直面している現実生活の中の具体的問題を知識・経験を活用しながら解決することによって、理解・態度・能力を統一的に育成しようとするところに学習指導の基本があり、子どもの生活の中の具体的問題を、自発的活動によって解決するという「問題解決」が方法原理となっていた。しかし社会科は戦前の日本の教育にはなかった教科であったため、その内容や指導方法が様々な模索されることになり、子どもが生活する身近な社会から題材を選択する視点や方法には大変な困難が伴った。この点において、身近な地域すなわち郷土の学び方や研究の仕方をガイドした『私達の郷土』は、当時の教員にとっては助け船的存在になっていたと推察する。学校現場では社会科は「土地の子供の上に立脚したものでなければならない」「社会科には教材はない。生活そのままが教材に拾い上げられる」「常に問題にぶつからせる」等、研究会や講習会における報告が繰り返し行われていたが、大半の教員は出席者からの報告を聞く程度で「社会科はわかりにくく、取り扱いにくく、しまつにおえないもの」と見られていたのが現状であったからである<sup>30)</sup>。

『私達の郷土』は、社会科において郷土研究に取り組むことの意義を教科目標との関わりから以下のように提言している。

「私たちがいま勉強している社会科の学習は、社会生活がよくわかり、社会の進展にやくだつようにやってゆく力をつくってもらいたいためである。どこまでも皆さんがふだんの経験をもととして、自身でどしどし研究してゆく学習である。日頃の経験をもととすることになれば、まず郷土のことからはじめるのがあたりまえで、社会科の大部分が、郷土の研究となってくる」<sup>31)</sup>。

現実の生活世界はまさに「郷土」という環境である。郷土を研究することは社会科を推進させる上で欠かせない必須内容であり指導方法なのである。千々和の言う「社会科の大部分が、郷土の研究」という表現は、当時の教員の意欲や関心、そして何といたっても社会科推進への安心感を引き出す適切な表現であったにちがいない。

## おわりに

『私達の郷土』の結びとなる最後の一文には「どうか、自分の郷土をしっかりと研究して、力強く、郷土をたてなおしていこうではないか」<sup>32)</sup>、と千々和の郷土教育への期待と信念が添えられている。郷土教育の推進・展開は、単に郷土の再建にとどまるものではない。本書の内容等を鑑みると、千々和らは日本の再建、民主国家としての確実な歩み出しにおいて、郷土教育こそが新教育の推進役としての役割を担う重要な教育として位置づけているのである。本書が、郷土教育の取り組みを詳細かつ具体的に内容や方法として提示し、さらに新教科社会科の役割を明確にして当時の教師の指導上の不安を払拭し、社会科を推進する上で有効かつ必要なガイド書として作成されている点において社会科創設時に極めて重要な役割を果たしていたと判断できよう。

また、一般に「郷土」は地理学習として理解され、位置づけられることが多かった。しかし、本書は全国師範学校歴史教育研究会という歴史教育の充実を目指した教員によって意欲的に編集された一冊であり、戦前の軍国主義・超国家主義推進の一翼を担った歴史教育の根本的な改善を図るために、戦前の郷土教育の価値・意義を継承し発展させながら新教科社会科を構築し、推進すべきであるとする当時の教師の考え方や社会状況等を知る上で極めて貴重な資料であるといえる。今後は本書がどのように学校現場に受け入れられ、活用されていたのか、その実態をさらに究明したいと考えている。

## 【註及び引用文献】

- 1) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著 『社会科の友 私達の郷土』, 世界社, 1948, 奥付.  
 ここには、昭和23年3月8日の日付で全国師範学校歴史教育研究会と株式会社世界社の連名による「社会科の友」叢書発行の趣意が掲げられている。
- 2) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, 奥付.
- 3) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, 奥付.
- 4) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, p.2.
- 5) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, p.1.
- 6) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, p.1.
- 7) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, pp.1-2.
- 8) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, p.10.
- 9) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, p.22.
- 10) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, p.24.
- 11) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, p.129.
- 12) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, p.123.
- 13) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, p.124.
- 14) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, p.125.
- 15) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, pp.125-128.

※本書で使用されている番号を、整理の都合上変更して使用しているが、記載順序や内容については一切変更していない。

- 16) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, pp.189-190.
- 17) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, p.136.
- 18) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, p.140.
- 19) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, pp.169-189.
- 20) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, p.188.
- 21) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, p.168.
- 22) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, p.169.
- 23) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, p.169.
- 24) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, p.168.
- 25) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, p.1
- 26) 文部省 『郷土の観察 教師用』,  
<http://kindai.ndl.go.jp/search/searchResult?ndc=375.3&ndcOp=&detail-SearchTypeNo=K&filters=4%3A14%2F1942%7C4%3A14%2F1942%2F194200&rows=20>, 1942, p.33.
- 27) 文部省 同上書, p.35.
- 28) 静岡県藤枝市立藤枝小学校の「校務日誌」によれば、昭和22年4月から9月にかけて社会科の講習会及び研究会の報告が16回行われている。しかし、授業が開始された9月10日を最後に校内での協議や報告は一切行われていない。  
(松永育男『新資料でみる静岡県の戦後教育改革』, 民衆社, 1995, pp.105-109.)
- 29) 社会科は問題解決学習を主流としたため、第1学年という段階には教科書は必要ないものとされ、第2学年以上に発行されることになった。
- 30) 松永育男 前掲書 28), pp.106-109.
- 31) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 前掲書 1), pp.124-125.
- 32) 全国師範学校歴史教育研究会編 千々和實著, 同上書, p.190.

#### 【参考文献】

- 上田薫『上田薫著作集 8 戦後新教育の挑戦』, 黎明書房, 1993.
- 上田薫『上田薫著作集 13 人間のための教育・社会科とその出発』, 黎明書房, 1994.
- 梅根悟『梅根悟教育著作選集 4 生活学校の理論・単元』, 明治図書, 1977.
- 亀井弘明・小島邦弘編著『地域と結ぶ学校』, 教育出版, 1990.
- 木村博一『日本社会科の成立理念とカリキュラム構造』, 風間書房, 2006.
- 小原友行『初期社会科授業論の展開』, 風間書房, 1998.
- 静岡県立教育研修所編『静岡県教育史 通史篇』, 図書印刷, 1973.
- 船山謙次『戦後日本教育論争史—戦後教育思想の展望』, 東洋館出版社, 1958.
- 船山謙次『続 戦後日本教育論争史』, 東洋館出版社, 1960.
- 山口幸男・山本友和編著『小学校社会科教育の探求』, 学芸図書, 2001.